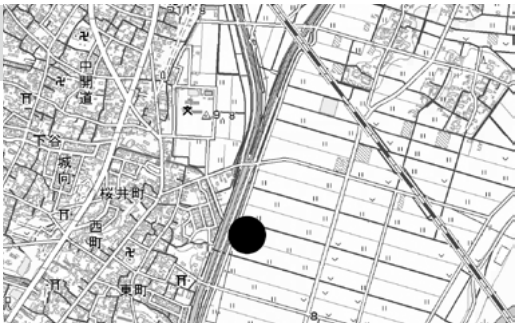
亀塚（かめづか）遺跡



調査地点（1/2.5万「安城」）

所　在　地　安城市東町秋葉下
（北緯34度55分11秒 東経137度5分54秒）

調査理由　中小河川改良工事（鹿乗川）

調査期間　平成28年11月～平成29年2月

調査面積　1,300㎡

担　当　者　永井宏幸

調査の経過　調査は、中小河川改良工事事業（鹿乗川）にともなう事前調査として、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて、愛知県埋蔵文化財センターが委託を受け、発掘調査を実施した。調査は、1,300㎡おこなった。関連事業として亀塚遺跡の発掘調査は今年度が初年度となる。なお、安城市教育委員会による発掘調査は、隣接地で３回実施されている。

立地と環境　遺跡は、碧海台地東縁辺下を南北方向に沿って流れる鹿乗川流域と遺跡の東方約1㎞に流れる矢作川によって形成された沖積地に立地する。標高は現況８ｍ前後である。

調査の概要　今回の調査区は安城市教育委員会による第１次調査（1973年）の実施された鹿乗幹線水路が隣接する。調査区は１ヶ所で、16A区として進めた。調査の結果、調査区の南北を河川あるいは後背湿地に囲まれた微高地上に展開する江戸時代以降を中心とする生産地関連の遺構群、さらに弥生時代中期後半までに埋没する河川跡を確認した。

江戸時代の遺構は、幅50cm前後、長さ5～10m、深さ30cm前後を測る溝群が２ヶ所と１列に並ぶピット群、長軸5m前後、深さ1m前後の大型土坑などがある。これらの遺構から出土する遺物は近世陶器類はなく、細片化した古墳時代前期を中心とする土器である。当初は古墳時代前期の遺構である可能性も想定した。ところが、調査区の北東隅と南側で確認した流路より中・近世の陶器類が出土した。遺跡の層序を検討した結果、これら流路と同時期あるいはそれ以降の遺構であると判断し、江戸時代以降とした。

溝群は、両者ともに北西から南東の方向に隙間なく重複する配置が見て取れる。これら以外の溝も概ね同一の方向かあるいは直交する方向の溝が多い。密集して重複する溝群は、畑の畝立ち溝を想定した。大型土坑の掘り込みが湧水層に達していることから、野井戸など水を貯め置きする施設の可能性がある。これらの遺構は砂質シルト層と砂層の互層に掘り込まれている。この層直上は近代以降の耕作土によって削平されている。

遺構を確認した砂質シルト層と砂層の互層は流路と推定して調査を進めていた。江戸時代以降の遺構群の調査に併行しながら、調査区内に十文字のトレンチを設定し下層の状況を探った。この十文字のトレンチと調査区壁トレンチの断面から、調査区を南北に縦断する流路群であると判断した。そのうち、もっとも新しい流路はシルト層が流路中心部分に堆積する。このシルト層は大型土坑に南接する位置から始まり、十文字にトレンチが交差するあたりをとおり、弥生時代中期末の細頸壺が出土するあたりへ続く。流路は堆積状況と細頸壺の出土から、弥生時代中期末までに埋没したと思われる。

ま　と　め　今回の調査では、弥生時代後期から古墳時代前期にいたる亀塚遺跡の中心となる遺構・遺物が少なかった。ただ、弥生時代中期末頃までにはこの付近に微高地が形成されたことが流路の埋没時期から判明し、亀塚遺跡の始まりをかんがえる上で大きな成果を得た。

（永井宏幸）

写真１　稲架？の柱列

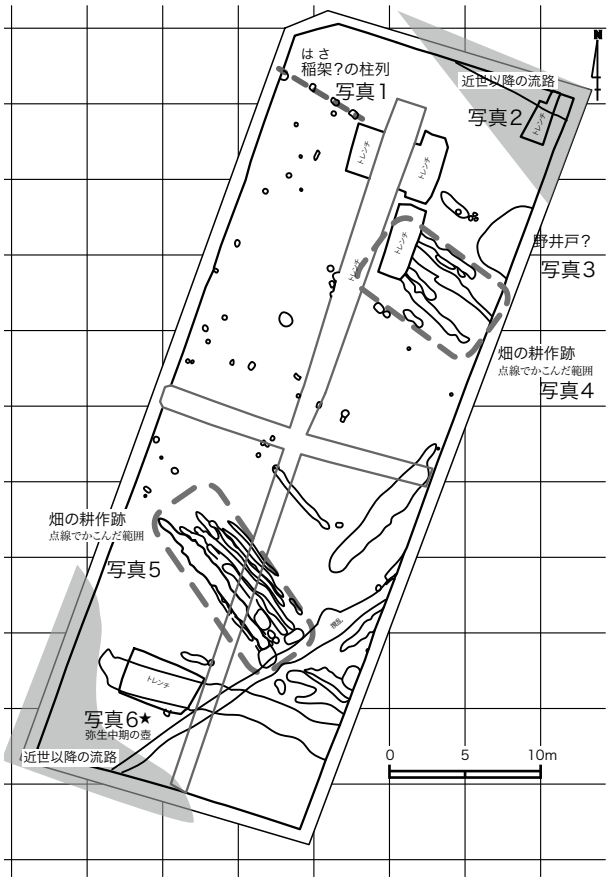
写真２　江戸時代以降の流路

写真３　大型土坑（野井戸？）

写真４　畑の耕作跡

写真５　畑の耕作跡

写真６　弥生時代中期末細頸壺



16A 区遺構全体図（S=1/500）